

旅籠屋「清明屋」

旅籠屋

旅籠屋とは、江戸時代、武士や町人などの旅人が宿泊した施設です。1泊2食付きを原則とし、米を持参して自炊する形式の木賃宿とは区別されています。

二川宿の旅籠屋

江戸時代、二川宿には多いときで40軒(享保14年)、少ないときは20軒(安永5年)の旅籠屋がありました。

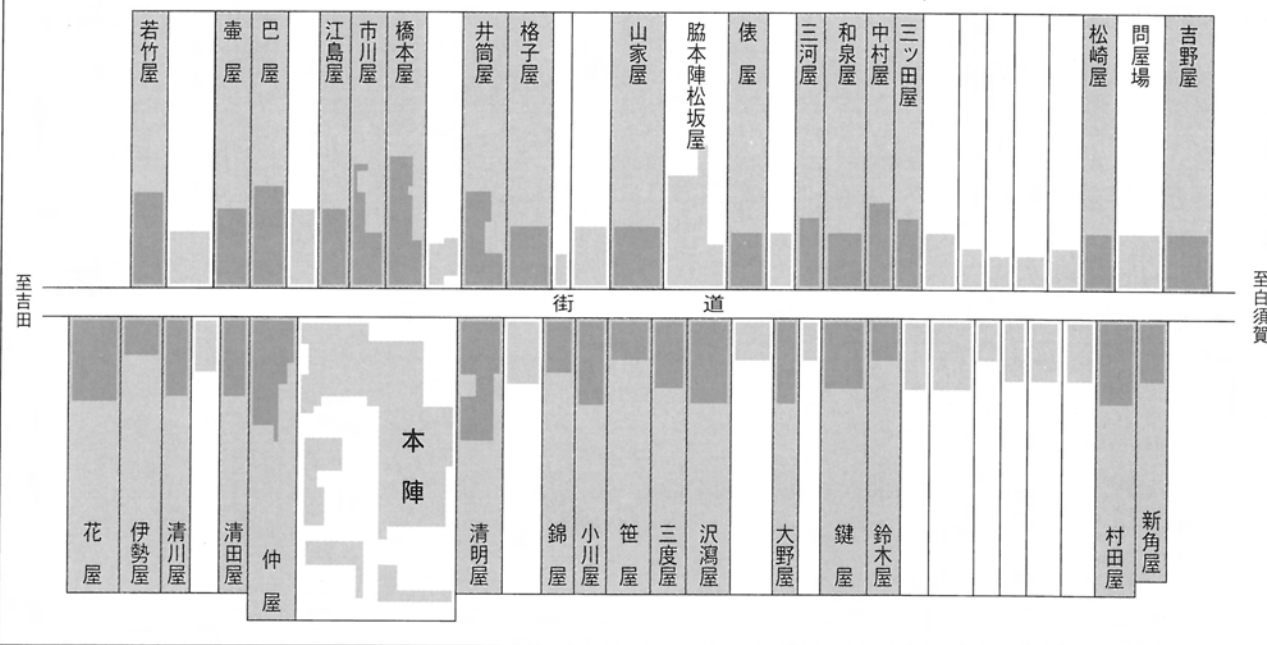
天保14年(1843)の記録では38軒です。東海道の宿場の平均は56軒でした。家数が同規模の御油宿・赤坂宿にはそれぞれ62軒の旅籠屋がありましたが、これらと比べても二川宿の旅籠屋の数はかなり少なく、本陣と同様宿泊客の少なかったことが原因と考えられます。

立ち並ぶ旅籠屋

二川宿はもともと二川と大岩の二村で宿場の業務を行ってきましたが、大岩は加宿であったため旅籠屋の経営は許されませんでした。そこで旅籠屋は本陣・脇本陣・問屋場のある宿場の中心、二川中町に集中していました。



江戸末期の主な旅籠屋



旅籠屋「清明屋」

清明屋は江戸時代の後期寛政年間(1789~1801)頃に開業した旅籠屋で、代々八郎兵衛を名乗っていました。本陣のすぐ隣にあったことから、大名行列が本陣に宿泊した際には、家老など上級武士の宿泊所ともなりました。

平成12年倉橋家より豊橋市へ建物が寄贈されたのを受け、平成13年市有形文化財として指定し、平成14年より3年かけ改修復原工事を行いました。

清明屋の建物

解体修理の結果、現在の建物は文化14年(1817)に建てられたことが判明しました。明治以降旅籠屋を止め薬屋を経営していたこともあって、多くの改変を受けていましたが、間取図の残る江戸時代末期の姿に復原しました。



旅籠屋清明屋間取図

ミセの間、小ミセ

街道に面した板の間。荷物置場や帳場として利用されました。

ウチニワ、ミセニワ

奥への通路となった土間。ウチニワにはかまどがあつて炊事をしました。

台所

食事の準備や配膳をした部屋です。

繋ぎの間、繋ぎ次の間

一般客の宿泊に使われた部屋です。

奥座敷、奥次の間

主屋の最奥部。一段高くなつた部屋で、床の間と入側が付いていました。家老など上客の宿泊に用いられました。

裏座敷

隠居部屋。明治に取り壊されましたが、土蔵とともに図面により復原しました。



東海道